

科目ナンバー	SEM-3-003-ky			科目名	課題演習Ⅰ（竹内）		
教員名	竹内 愛			開講年度学期	2020年度 前期	単位数	2
概要	近年、社会のグローバル化に伴い、仕事や留学の為に長期海外滞在をする日本人が増えています。海外に行かずとも、日本社会の中でも急速に国際化が進んでいることから、これからは世界のどこに居ようとも、国際言語である英語力はもちろんのこと、お互いの文化理解を伴うコミュニケーション力が必要になってきます。そうしたことから、我が国の英語教育においても、言語スキルの獲得だけでなく異文化理解育成の重要性が問われており、「英語力」と「異文化理解能力」は、これからの国際化時代を生き抜くための二大必須条件と言えるでしょう。この授業は、後期で行う卒業論文テーマ設定の導入部分として、異文化理解能力や異文化間コミュニケーションについての基礎知識を学びます。						
到達目標	(1)「異文化理解能力」、及び「異文化間コミュニケーション」についての基礎知識を身に付ける (2)英語文献を読むことによって英語力を高める (3)ディスカッションを通して、国際交流や異文化理解を促進する 以上の3つを学習目標と定め、後期で卒業論文のテーマを見つける手がかりとする。						
「共愛12の力」との対応							
識見		自律する力		コミュニケーション力		問題に対応する力	
共生のための知識	○	自己を理解する力		伝え合う力		分析し、思考する力	○
共生のための態度		自己を抑制する力		協働する力	○	構想し、実行する力	○
グローバル・マインド	○	主体性		関係を構築する力	○	実践的スキル	
教授法及び課題のフィードバック方法	授業は演習形式で行います。初回到課題文献を割り当てますので、担当者はその内容をパワーポイントないしプリントにまとめて自分の回で発表をし、その発表の基づきディスカッションを行います。担当教員による講義だけではなく、この、ピアティーチングという形式で「他者に教える」ということにより、学習の理解を深め研究内容に親しんでもらいたいと思います。						
アクティブラーニング	○	サービスラーニング			課題解決型学修		
受講条件 前提科目	「異文化間コミュニケーション」に興味があり、一定の英語力を有する人。授業にはしっかり準備をして臨み、欠席をしない人(週に一度のゼミですので、一回の欠席が学習に大きく影響します)。						
アセスメントポリシー及び評価方法	授業への参加度・貢献度(ディスカッションへの積極的参加、及びポートフォリオでの振り返りを含む) 50% 担当部分のプレゼンテーション30% 期末レポート20%						
教材	「異文化コミュニケーション論」矢島智子／久保田真弓(著)松柏社(2012) ISBN 9784775401842 「異文化理解力」エリン・メイヤー(著)英治出版(2015)ISBN 9784862762085						
参考図書	「ケースで学ぶ異文化コミュニケーション誤解・失敗・すれ違い」久米昭元、長谷川典子(著) 有斐閣選書Ⅰ SBN 9784641281080						
内容・スケジュール	第1回：イントロダクション(シラバス説明、発表の分担決定、自己紹介) 第2回：リサーチとは(講義) 第3回－第14回：口頭発表とディスカッション前期には各自2回プレゼンテーションを担当します。教科書の1章をまとめたものをプレゼンテーションし、残りの時間でディスカッションのファシリテートをするために、ディスカッションクエストも用意して下さい。プレゼンテーションの担当ではなくとも、毎回全員が教科書を読んだ上でゼミに臨むものとします。 第15回：総まとめ						

Number	SEM-3-003-ky	Subject	Junior Specialty Seminar I			
Name	竹内 愛(Takeuchi Ai)	Year and Semester	First semester for 2020	Credits	2	
Course outline	This is a thesis preparation seminar for junior students. The aim of this seminar is first to equip students with the basic knowledge of intercultural communication as well as multicultural understanding. Then in fall semester, students will be introduced to various types of academic journals in the field both in Japanese and English so that they become familiar with a style of academic research paper.					

